

# 生徒の意欲引き出す

学習塾「第一ゼミナール」や通信制高校「第一学院高等学校」を運営する総合教育サービス企業のウィザス。新型コロナウイルス禍を機にオンライン教育にも力を入れている。生駒富男社長(64)は「ニーズに応じた学習塾を作っていきたいですね」と力を込める。

【聞き手・谷田朋美、写真・北村隆夫】

## けいざい 最前線

——第一ゼミナールの指導にはどういった特徴がありますか。

◆一般的に「試験に向けて一生懸命覚えなければならぬ」「できるまで何度でもやらなければならぬ」「嫌々勉強しても、成績を上げるには限界があります」。

約20年前、生徒たちへのより良い指導方法を探る中で行き着いたのが「楽しく意欲的に勉強している方が脳の働きも活発になる」という脳科学分野の研究でした。成績アップのための指導法は重要で

## 塾や通信制高校運営

が、生徒自身のやる気上げることが最も大きな力になると考えたのです。そこで、脳科学分野の研究者とともに生み出したのが、意欲を引き出すための独自の「プラスサイクル学習法」でした。

——どのような学習法ですか。

◆まず、生徒一人一人が「何のために学ぶのか」という学習目的を考え、明確にします。これが脳の機能を刺激し、学習意欲を高めることにつながると考えています。

具体的には、1週間ごとに達成したい目標を掲げ、学習計画を立てます。学習の進み具合をその都度確認しながら計画を実行し、1週間後に確認テストをして目標の結果を振り返ります。自分に足りない部分を確認し、次の1週間の目標を立てる、というプロセスを繰り返すものです。

## ウィザス

## 生駒富男社長



いごま・とみお 1959年、鹿児島県生まれ。法政大卒業後、商社を経て84年、学力研修社(現ウィザス)入社。93年、取締役。2005年、第一学院高校理事長。09年から現職。

生徒からは「成績が上がった」「勉強が面白くなった」「楽しくてやる気が出る」といった前向きな声が上がっています。

——第一学院高校について教えてください。

◆茨城県高萩市と兵庫県養父市に本校をおき、全国に54拠点を展開する通信制・単位制高等学校です。

当校には、スポーツや芸術活動と学業の両立を目指す生徒のほか、不登校や高校中退、

全日制高校からの転入など、多様な生徒が在籍しています。学校教育の隙間で将来を見いだせないでいる子どもたちの新たな学びの場や居場所、成長の機会を作ってきたと思っています。

携し、オンライン授業だけでなく卒業できる「ネットの大学managara(マナガラ)」をつくりました。中高大10年一貫教育の構築を目指していきます。

——教育に携わる上で何を心がけていますか。

◆第一ゼミナールの講師にはテストの結果はもちろん、計画通りに勉強を進めた、字がきれい、姿勢が良いなど、生徒の良い面を見て「褒める教育」の実践を心がけてほしいと伝えていきます。自己肯定感の向上がやる気にもつながると考えているからです。

創業以来、「目標は志望校合格、目的は社会で活躍できる人づくり」を教育方針に掲

ウィザス 1976年、学研塾(現第一ゼミナール)を母体として、学力研修社(現ウィザス)を大阪府松原市に設立。小中高生を対象とした集団指導や個別指導をはじめ、プロ通訳者の講師らによる英語教育など多彩なコースを提供する。東証スタンダード上場。2023年3月期連結売上高は198億円。連結の従業員数は918人(3月末時点)。

けてきました。そのためには、まず私たち教える側が社会にチャレンジする姿勢が大切であるとの思いで仕事に取り組んできました。

——多様な事業分野に挑戦していますか。

◆グローバル化を見据え、2018年にフィリピンの語学学校をグループに加え、22年にはベトナムの日越大と共同で日本語教育センターを日越大に開設しました。国内外でオンライン、オンラインの日本語教育を推進していきたいと考えています。

今後社会的ニーズへの感度を高め、教育を主軸に事業の更なる拡大に努めていきます。

ウィザスでは、一人一人の状況や個性を尊重する「1/1の教育」を理念に掲げている。生駒社長は「試験問題の

答えはひとつですが、人を育む上では子ども数だけ答えがあります」と話す。講師らは生徒と向きあう時間を大切に、一人一人の生徒の可能性を引き出すことに心を配っているという。対話が大事なのだ。

## インタビュー